

自著を語る～ MY FIRST BOOK ～

中里 英樹

『男性育休の社会学』

さいはて社、2023年



本書の「はじめに」で、現在の日本の男性の育児休業取得推進の動きに対する違和感の理由を明らかにし、その背景にある問題の解消の方策を考えることを、本書の目標として提示しています。このような目標のもと、本書は、日本の男性の子育てと育児休業に関わる変化を、文化・政策・実践の3つの側面から詳しく分析しています。また、日本の状況を相対化し、課題と向かうべき方向を考えるために、国際比較を織り交ぜています。

テーマを「男性育休」に限定することによって、多様なデータと手法を用いて、社会の変化の仕組みを捉えようとするところも、本書の特徴といえます。具体的には、父親の育児に関する専門家などの言説、男女の家事・育児・就労に関する量的データ、日本とドイツにおけるインタビュー、ドイツとスウェーデンにおけるフィールドワーク、制度に関する資料、国会や審議会の議事録等改正プロセスに関する資料などを扱っています。

主な知見は次のようなものです。子育てとキャリアのジェンダー平等に向かって人々の実践が変化するためには、父親が自立し、子育ての完全な担い手になるという実践の変化が求められる。その実践がさまざまな条件を備えた一部の男性だけに限定されるような状況を乗り越えるためには、男性の単独での育児休業取得を促すような育児休業や公的保育の制度が重要である。そして、中長期的な視

野を持つ制度設計を行いづらくさせている現在の日本の政策決定プロセスが、その実現を困難にしている。

——出版に至った経緯を教えてください。また、出版後に印象に残った反響や出来事がありましたか？

まず、「自著を語る」という企画の基本的な想定と異なり、本書が博士論文を元にした著書でないことに言及しておきたいと思います。私は、博士課程に3年間在籍した後、博論を出さずに退学し、1年間のアメリカ留学を挟んで、1998年に大学に初めての職を得ました。その年の第1子の誕生をきっかけに、子育て期の仕事と生活が中心的研究テーマになっていき、2012年から育児休業に関する国際研究ネットワークに加入します。その活動の中で、男性の育児休業の重要性を認識し、北欧など他国の育休制度の理解を通して日本の制度の課題にも気づきました。ひとりの社会学者が制度の課題を指摘したところで、どれだけの意味があるのだろうか、と自問しながらも、できる研究を重ね、さまざまな機会を捉えて、成果を発表してきました。

そうこうするうちに、男性の育休取得に関する社会的な関心は高まってきました。一方で、自分自身が強調してきた父親の「単独」取得の意義や、それを促すための制度上の課題について、メディアなどで取り上げられることは、ほとんどありませんでした。頻繁な制度の改正も、その課題を解消する方向に進

んでいないと感じ、「自分の研究がインパクトを与えられていない」というもどかしさが、日に日に強くなっていきました。あわせて、周りで多くの人が単著を出している中で、出遅れ感のようなものをそれ以前から感じていたこともあり、単著の出版を真剣に考えるようになります。

そこで企画を持ち込んだのは、いわゆる「ひとり出版社」である「さいはて社」です。代表の大隅直人氏は、私の大学時代からの友人であり、学術書や、一般読者に広く読まれた子育て関連の本、そして写真集や絵本まで、幅広く丁寧な本作りをしていることを知っていました。独立前には多くの社会学専門書を手がけてきた、ベテラン編集者です。初めての単著を、自信を持って送り出せるものにするために、広い視野から伴走してもらえればと思い、2021年の年末近くに相談を持ちかけました。出版にける思いや企画の大まかな内容を伝え、力強く背中を押してもらって、大隅氏の率いるチームとともに、出版に向けて動き始めました。

出版後は、直接いただいた感想、さまざまな媒体に掲載された書評や本の紹介が何よりうれしい反響でした。それぞれ異なる着目点から本書の狙いをしっかり受けとめていただいたことが分かったり、自身の気づいていない意義を教えてもらえたりと、ひとつひとつに大きく励まされました。そして、出版前には思いも寄らなかったメディアや組織から声かけがあり、これまでの研究を通じて重要だと考えてきた内容を広く伝える機会に恵まれました。本を名刺代わりに、問題意識を共有する人たちにこちらからアプローチして繋がれるようになり、次の段階の研究への弾みがついたことも大きな収穫でした。

——執筆時に意識・工夫したことを教えてください

本の内容に関して、意識・工夫したことに関しては、企画の相談をしたときに編集者の大隅氏から提示された目標が基本になっていました。

- ・一般読者が学問はいいものだと感じられるもの。
- ・分かりやすく単純化するだけでなく、複雑なものを理解するよろこびを伝える。
- ・状況が変わった10年後でも社会学者の仕事として意味のあるもの。

このような、かなり難しい宿題が、ずっと念頭にありました。

こうした目標を達成するために、章の構成や繋がり方について見直しを重ねました。多くの部分は刊行済の論文等からなっているので、すべてを1冊にまとめてみると、重複している内容もあり、どの章で削って、どの章で残すかを全体の流れから慎重に検討する必要がありました。また、政策、実践、文化という異なる側面、さらに日本と比較対象の国々の情報を、どのような順序で並べると、課題と方策がより浮き彫りになりやすいのか、などについても考え続け、場合によっては、ある章の一部を別の章に取り込む、などの組み替えも随時行いました。

このようなことを考えながら、全体を執筆していききましたが、大まかな草稿が完成してきて、これでいいかなと思っても、大隅氏からは、全体を貫く縦糸がまだ見えない、広い読者層にとっての本書の意味が十分説明できていない、という指摘が続きました。最後の最後までなかなかゴールが見えない状況が続きました。しかし、大隅氏自身の言葉を借りれば、「著者に内在するものを大切にしながらともに探り、『頭』だけではなく『心』で考えることを意識して、漢方の針を打つように、はたらきかけを続けて」くれたことによって、自分が本書全体で伝えたいことを心のまま終章に書き下ろすことができ、タイムリミットギリギリで本書の縦糸が繋がりと、脱稿となったのでした。

(甲南大学文学部教授)

E-mail: nakazato@konan-u.ac.jp